

令和3年度第2回 京都市市民参加推進フォーラム 摘録

■開催日時：令和3年9月7日（火） 午後3時～午後5時

■開催場所：オンライン会議（委員，事務局）

※ 事務局はSDGs・市民協働推進担当執務室から参加

■議題：

- (1) 各部会による議論
 - ・ 市民参加の裾野拡大検討部会
 - ・ 「市民力」指標検討部会
- (2) 各部会の意見交換内容の共有

■報告事項：

- (1) 令和3年度第1回市民公募委員サロンの実施結果について
- (2) 新たに設置された附属機関等に係る協議結果及び市民参加に関する新しい事業や取組

■公開・非公開の別：公開

■出席者：市民参加推進フォーラム委員13名

荒木委員，安委員，乾副座長，内田座長，金田委員，木村委員，篠原委員，嶋倉委員，菅谷委員，並木委員，村田委員，森川副座長，森実委員

■傍聴者：なし

■特記事項：

動画共有サイトYouTube（ユーチューブ）を利用し，後日，音声配信を実施する。
Zoomを用いたWeb会議形式で開催した。

【議事内容】

1 開会

2 座長挨拶

（内田座長から一言あいさつ）

（議題の説明，資料確認，時間配分について説明）

<内田座長>

- ・ それでは，部会に分かれての議論を進める。部会に分かれたら，森川部会長，乾部会長に，以後の進行をお願いする。

3 議題

議題（1）各部会による議論

市民参加の裾野拡大部会

<森川部会長>

- ・ それでは、部会において、議論を進めたい。事務局から資料の説明をお願いします。

<事務局>

（資料1「第1回市民参加の裾野拡大部会資料」説明）

<森川部会長>

- ・ 今回、部会の第1回となるため、この部会で議論する内容を確認したい。
- ・ 第3期京都市市民参加推進計画の策定にあたり、「市政参加の裾野拡大」、特に若者への裾野拡大が大きな論点となっていた。今年度、このテーマに対してどのように取り組むか議論していく。
- ・ 若い世代の対象は、小学生、中高生、大学生、20代の社会人、子育て世代の5つのカテゴリーが出てきており、どの年代を対象に設定するのか、また、市民参加の中の「市政参加」「まちづくり活動」のどちらについて議論するか、切り離して考えるのは難しいのか、という具体的な部分を決めていきたい。
- ・ また、今年度の取組だけでなく、第3期計画の今後5年間の進め方を見越して考えても良いかもしれない。「市民参加の裾野拡大」のテーマに対してどのように取り組んで貢献していくかという大枠のみが決まっているという前提で、本日の部会ではより具体的な内容についての議論を進めていく。

<森実委員>

- ・ 「市政参加」は抽象的な表現であるため、より具体的に考える必要がある。市政に興味を持ったり、問題が起きた時に、市政を調べ行動できるような、段階に応じた参加の窓口が整っていれば良いと思う。若者を市政に巻き込んでくためのアプローチが、他の世代の参加しやすさにもつながると思うので、そのような議論を進めていきたい。

<嶋倉委員>

- ・ 自分自身も大学生であるため、裾野拡大について自分の実体験等をもとに意見していきたい。裾野拡大では、1人でも2人でも市政に参加する人が増えれば良いと思う。アンケートで20代の市政参加が少ないという結果が出たのであれば、今後も同様のアンケートの結果に注目しながら、より良い方向になるように考えていきたい。

<森川部会長>

- ・ 論点を整理していきたい。どの部分に焦点をあてるか、或いはご自身の取組で興味のある内容を共有していただきたい。
- ・ また、事務局に対して、このような取組、調査等ができないかという提案でも構わない。

<安委員>

- ・ 「みんなでつくる京都」のリーフレットは、すでに配布し、活用しているのか事務局に聞きたい。

<事務局>

- ・ 第3期計画と一緒に配布しているが、まだ配架等はできていない。今後の活用方法を検討しているところである。本部会でも活用案を検討いただけるとありがたい。

<安委員>

- ・ 「みんなでつくる京都」のポータルサイトを見た。様々な取組みが紹介されているが、自分が興味を持っている分野の活動を見つけるのは難しかった。
- ・ この部会では、新しいイベントをするより、このような既存のホームページや取組を充実させて、情報を見つけやすいようにしたほうが良いのではないか。

<菅谷委員>

- ・ 若い人がこの地域に住み、コミュニティに巻き込めるのか、という面ではハードルが上がってきているように感じる。地域の委員会でも同様の議論をしたが、若者の絶対数が減っている中で、地域コミュニティに引き上げるのは難しくなっている。
- ・ 京都でも若者の流出が言われているが、自分の家を持たず、周辺地域に流出しているため、京都市の地域活動に巻き込んでいくのは難しい。

<安委員>

- ・ その地域に住んでいても、子どもがいたり、学校を通じて、というようなきっかけがないと地域に関わる接点がない。自分で地域コミュニティに入り込んでいく人は稀だと思う。

<菅谷委員>

- ・ 地域のイベントや調査活動等（空き家調査等）がきっかけになると思うが、1年半ほどコロナの影響で実施できていない。これらの継続には危機感を持っており、オンライン等の他の手段での取組も検討したい。

<森実委員>

- ・ ボランティアが活発な地域がある。例えば、老人ホームで得意なマジックなどを披露する活動をされており、本人的には得意なことを見てもらえるのが嬉しいという感覚で、ボランティアという自覚がないため、参加を促しやすい。具体的な活動への呼びかけの手法として良いのではないか。

<村田委員>

- ・ 若者に一番届きやすいのは SNS だと思う。リーフレット等のデータをホームページに掲載しても、若者はアクセスしない。Twitter, Instagram から情報を得ているようである。例えば、龍谷大学の学長は、フォロワーが 13,000 人いる。インフルエンサーが発信することで、自分もやってみたいと思う若者もいるはずなので、SNS の活用は必須だと思う。

<嶋倉委員>

- ・ 大学生、特に政策学部の学生は、ゼミのフィールドワーク等で地域への関わり方を学ぶ機会があり、小学生は地元で根付いた授業がある。一方で、高校生は大学受験等で忙しく、地域に関わる時間が一番ないため、高校生に地域の活動をアピールできれば、一気に裾野拡大が進むのではないか。

<安委員>

- ・ インターネットで調べていると、SDGs に興味があると発信している高校生が多い。SNS で巻き込める余力がありそうなので、ミス〇〇や親善大使のような人でアンバサダーのような役割を果たしてくれる人がいたらよい。

<森川副座長>

- ・ 京都市では、著名人で協力していただける方はおられるのか。

<事務局>

- ・ 「市民参加」という点ではおられないが、市全体では、山中教授や陸上短距離の朝原氏等に様々なイベントにご登壇いただいている印象がある。

<森実委員>

- ・ 財政難で市政に対する興味が高まっている。財政改革のパブリックコメントは、約 9,000 件の意見が集まったそうである。年代別では、30 代からの意見が一番多く、約 800 件あった。特に保育料関係の意見が多かったと思うが、これらの意見をしっかりと政策に反映させる必要があると感じる。

<森川部会長>

- ・ 様々なご意見をいただいたが、ここまでの議論をまとめて、各委員の意見で共通する部分はあるか。

<篠原委員>

- ・ 大学生よりも高校生を対象にするのが良いと思う。大学生は就職すると、時間的に参加できないという現実的な問題がある。また市政に参加するような大学生はすでに取り組んでいる。
- ・ 高校生は、ダイレクトに取組の成果が出るわけではないが、心に残って将来の市政参加につながると思う。
- ・ また、高校の授業では、探究学習の題材に困っている先生が多い。このような学校とつながって、市政参加の学習を授業内でできれば、先生にとっても学生にとってもメリットがある。

<菅谷委員>

- ・ 学校の授業から、継続して地域に入っていく学生は、ほんの一握りだと思う。それよりも地域に入ってきた若者の活動の支援に力を入れてはどうか。

<村田委員>

- ・ 高校では「公共」の科目が新たに始まるため、現場でも求められている内容だと思う。フォーラムとしては、委員が実際に授業に出向くのか。そうではなく、ヒアリング調査等を通じて京都市と学校等の連携事例集を作る方法も良いと思う。

<事務局>

- ・ 大学との連携に関しては、大学政策を所管する部署で把握しているが、高校への事例を総合的に把握している部署は思い当たらない。高校生へのアプローチの事例集を作るのは、参考になるかもしれない。

<菅谷委員>

- ・ 既存の裾野拡大の取組の効果を検証することも重要である。間口ばかりを広げて機能していないと勿体ないと思う。

<森実委員>

- ・ 裾野拡大の効果検証や、情報を求める現場を支援するコンシェルジュのような機能を京都市が持つ必要があるのではないか。大学を支援する機関であれば、リエゾンオフィスがある。

<安委員>

- ・ 京都市はアクセスの少ないSNSが多いため、既存のSNSの活用方法を見出したい。

<村田委員>

- ・ 高校生・大学生等のアンバサダーを立てることができないか。

<事務局>

- ・ 過去のフォーラムでも、SNSが活用できていないことが議論されていた。また、SNSの運用に若者に関わってもらう案も議論された。まだ、その問題は完全には解消されていないため、今後も検討したい。

<森川部会長>

- ・ 既存のリーフレット・SNS等の活用，高校生への効果的なアプローチの2つの視点で進めていきたい。

「市民力」(仮称) 指標検討部会

<乾部会長>

- ・ 前回の議論では、スタンスとしては、アカデミックな形で進めていきたい人が多かった。一方で、市民が使いやすいという観点は忘れてはいけない。予備調査を行った上で、本調査という進め方が考えられる。
- ・ インとアウトの観点でいくと、因果関係（なぜそうなっているのか、そうなったのか）を図っていくようなものは必要である。
- ・ また、行政の動きや中間組織の動きを知ることも必要となってくる。議論だけにならず、色々と動きながら進めていきたい。
- ・ ロジックモデルを前提とすることが必要。目的と手段、それによる効果を図ることが大事である。市民を巻き込みながら、調査を行っていく視点も大事。
- ・ 愛知県長久手市では、市民と職員がワークショップを実施しつつ、共に指標を作っていた事例がある。

<金田委員>

- ・ 地域活動や市民活動では、見えない部分、測りにくいところがあると思う。
- ・ ロジックモデルは有効と考える。目的や仮説を設定してからでないときちんと測れない。
- ・ これまでから幸福研究などの評価の取組は多くあるので、それらが参考となるのでは。また、地域福祉活動を実践する中で、参加人数や事業の開催回数は測れるが、活動者のやりがいや思い、意識の変化など見えないものもある。実感のところを掘り起こせるか

も重要だ。対象も大きすぎると難しいので、小さいところで実践を積み重ねながら、指標を作っていくのもあり。

< 乾部会長 >

- ・ 実感調査の部分は確かに大事だ。対象も市民力とか政策とかの大きなものではぼやける。
- ・ 市民の行動力とリンクさせて考えるのがよい。

< 荒木委員 >

- ・ 市が行う政策を評価するか、市民の活動を評価するかではどちらも必要と思う。市民活動、地域活動に対して参加できているか、その活動が充実しているかを団体の代表者だけに聞くと偏った回答になったものとなる。一般参加者用のアンケートもあるとよい。
- ・ また、数値と実感が測れるとよい。加えて市の政策の効果があつたかどうかも聞く。事業が認識されているか、利用されているか、どうメリットを感じられるかを確認できるとよい。そうすれば、この地域ではここが弱いので、このメニューを使おうとか、このメニューは時代に合っていないということがわかっていくのではないか。

< 乾部会長 >

- ・ 例えば、町内会長だけではなく一般の方も対象にすることは大切。意識の高い方だけだと偏りが出る。
- ・ 花背山の家事業を辞めることが新聞に載っていたが、それが地域にどの影響をおよぼしたかなど、取組と結果の因果関係が重要であり、アンケート調査するなら設問の中に因果関係が測れるようにすべき。
- ・ 高校生2年生時点の学習意識がその後のキャリア形成にどのように影響したかの調査が10年間くらいされているそうだ。高校2年生で自立的な意識があると、その後の成長に大きくかかわっている。継続的に定点観測するような調査が重要と感じた。

< 荒木委員 >

- ・ アンケート調査は回答率が低い課題がある。市が実施したNPO向けのアンケートは30数%ほどで、私どものNPOの実施したものは10数%となっていた。
- ・ 主体的に活動している人からの意見だけだと偏りも出てくる。アンケートの取り方も工夫していきたい。

< 木村委員 >

- ・ ロジックモデルは有効と考える。
- ・ 結果的に、市民がうれしいことにつながることも重要だ。市民から見てそれがどのように作用するか、指標の活用が役所的にならないようにすべき。

<乾部会長>

- ・ 市民の分かりやすさについて、市民が求めるものとなっているかどうかが大事。
- ・ コロナ対策で指標が示されないまま、自粛せよと宣言が出されている。データをもとに議論された結果ではない印象評価だけで動いている。
- ・ 活動量が増加しているか、どのような活動が増えているか、活動のどこを見て評価するかの判断基準がないとダメ。そうすれば何が不足しているか、どこがうまく行っていないかが分かる。

<木村委員>

- ・ 数値的な基準を追い求めるとなると結局お金の部分を測ることとなるのでは。
- ・ 活動に対する魂、心意気、数値でない思い入れも大事であるし、同時にアウトプットも大事である。

<乾部会長>

- ・ 測った結果の負の側面も良い側面もある。このあたりは議論したい。
- ・ 地域力の上がり下がりを見て、それに基づき施策をうつ。
- ・ 長久手市は市民を巻き込みながら指標を作っていくという結論にいたった。

<木村委員>

- ・ 活動に対して、NPOのトップの評価、市職員の評価、第三者の評価、見る側により変わる。数値を扱うのの一つの側面からだ危険を伴う。

<並木委員>

- ・ ロジックモデルは龍谷大学のユヌスセンターでも企業やNPOの活動を評価する際に使っている。単なる参加者数ではなくどういう変化を起こしたいのかを関係者と共有して、モニタリングも一緒にするという長久手市の取組は良い。
- ・ ロジックモデルはエリアや対象を限定して活用すると、うまく効果を測ることができる。サステナブルな指標などいろんな挑戦がある。
- ・ 市民力という形で、市民の力を図るとなった場合に、市民の方もいい受け取り方はしない。計画の中の文言でも「市民力は～測ることの難しい大きな価値」とあるが、指標が必要とされている背景を共有し、これまでの施策やその進め方を共有することも必要。
- ・ これまでは、課題がありそれに対応する行政の政策があって、それを進めて解決するという直線的な取組であったが近年はそれが難しい時代に入っている。京都市の予算が少なくなっている。ステークホルダーの複雑化。科学技術の進歩。組織の在り方のトップダウン型から、ネットワーク型への変化等。ある時期に作られた政策が時代に合わなくなっている。政策をデザインするプロセスに市民の方が参画し、指標づくりも含めて参加することが求められている。

- ・ 大きな変化に対して対応するのに、市民の方のつながりを調査し、参加の形を的確に導き出す。行政がそれを的確にサポートする指標作りができればよい。

< 乾部会長 >

- ・ 市民力そのものは図りにくいですが、例えば市民参加推進力なら図れる。時代の変化に対応しながら、市民の自主的な参加や推進を測るということが大事。

< 金田委員 >

- ・ 概念がかなり広い。囲みを作って議論をしないとどこにいるかわからなくなる。

< 乾部会長 >

- ・ 市民参加推進力などと再定義するべきでは。

各部会の意見交換内容の共有

< 森川部会長 > 裾野拡大部会

- ・ 部会として一から議論するかたちで話し合いを進めた。これまでのフォーラムの議論の経過から、計画にも「自然と参加が促進されるデザイン」が組み入れられている。具体的に若い世代へどう働きかけていくかを検討した。
- ・ まずは、若い世代というのが、小学生、中学、高校、大学、就職したての社会人、若い子育て世代と幅がある。市民活動も市政活動とまちづくり活動とあるが、切り離して議論はしにくい。
- ・ 対象として、大学生がアプローチしやすいとあったが、高校生へアプローチしてはという議論となった。
- ・ 大学生は就職すると忙しくなるので、高校時代から種をまくとアプローチできるスパンが長く取れて良い。また、高校生だとクラス単位でまとめて対応できるなどのメリットがあると意見が出た。
- ・ 高校生時代に反応してもらえると自己の形成にもよいのではと意見があり、対象について一致点が見出せた。
- ・ そのため、高校生向けの事例調査が必要だという意見が出たのと、委員から情報を出し合おうということとなった。
- ・ 現在の取組がうまく行っているのか、を確認しながら部会でそれを受けて議論し、うまく進める方法を検討してまいりたい。

< 内田座長 >

- ・ 裾野拡大部会の報告に対して、入られていない方からご意見や質問はあるか。

<乾副座長>

- ・ 高校生の探究活動を手伝っている。文科省が高校生の地域活動を促進する補助金メニューを用意している。地域で活動する総合探究活動も幅広く様々な取組があるので、教育委員会に聞くのが良い。
- ・ 地域でのフィールドワーク授業だと、大学生に比べて制約がかなり多くなる。先生の引率が必須など。
- ・ 先生もこういった新たな取組になれておらず、コーディネーターとなる方が必要である。今はNPOの方などがその役割をしている。取組としては、すばる高校の取組などを聞いたことがある。

<並木委員>

- ・ 高校の探究授業の手伝いをしており、高校生のそこでの学びを言語化、定量化を行っている。地域活動に関わることの成果を分析している。
- ・ 高校生が訪問先の方にインタビューする中で地域の方の思い、情熱に触れられる。直に触れあい、人とのかかわり方、ロールモデルなどを学ぶことができる。地域への愛着もわく。精力的に地域で活動されている方に高校生が交わっていくのはよいことだ。

<内田座長>

- ・ コロナ禍で高校を休校にするという取組が高校生から出ていた。高校生の動きはあまり見られなかったが、少し見えてきた。18歳選挙権もあり、どんどん社会に出てくることは良いと考える。
- ・ それでは、次に市民力（仮）指標検討部会の議論の内容の共有をお願いする。

<乾部会長>市民力（仮）指標検討部会

- ・ 市民力を測るまたは測ることができるか、から議論があった。市民力か市民参加の推進力を測るか、また市民力を限定して測るかの議論もあった。
- ・ 顔合わせ会から振り返って議論を進め、政策と市民活動の両方を測るべきとの意見があった。ただ、普通に測ろうとすると、意識が高い人ばかりになるので一般の人を測れるようにすべきと意見が出た。
- ・ 定点観測が重要で定期的に測る重要性についても話された。
- ・ 行政の取組をどれだけ知っているか、それが参加につながっているかを測ることも話された。
- ・ 市民力を測るのにアカデミックなアプローチとするか、市民の分かりやすさからアプローチするかという議論でどちらも大事との意見が出ていた。
- ・ 優劣や点数をつけると、それだけで評価されてしまう負の側面も話し合った。
- ・ 科学的なデータをもとにするべきで、印象などの感覚では地域活動がうまく行っているかどうか分からない。ロジックモデルをもとに参加度を測るとの議論があった。

- ・ 小さくやってみて、それを繰り返すことで完成度高めてはとの議論があった。

<内田座長>

- ・ 1年でどこまで議論ができるか、そのあたりも念頭に議論を進めていただきたい。
- ・ 定例の会議だけだと時間も足りないので、臨時の会議を部会の中で合意が取れれば、それぞれ部会長のもと開催してもらえればと思う。

4 報告事項

報告事項（1）

<事務局>

（資料3「令和3年度第1回市民公募委員サロンだより」報告）

<内田座長>

- ・ 報告に対するご質問・感想等はあるか。

<金田委員>

- ・ オンラインで直接顔を合わせることはできないが、丁寧に場づくりがされていて楽しく参加できた。初めて附属機関等に参加する市民公募委員の共感できる場面の話題が多く、様々な属性の参加者の声を知ることができた。附属機関ごとに様々な雰囲気があると思うが、一定の場づくりのルールがあれば良いという意見も出ており、他の附属機関にも共有されると良いと思った。

<内田座長>

- ・ サロンへの参加で、それ以降の会議で発言しやすくなった等の効果は確認されているか。

<事務局>

- ・ サロンの結果については、参加者及び附属機関等の事務局に共有しているが、市民公募委員が発言できるようになったかという後追いの確認はできていない。

<森川副座長>

- ・ サロンに参加して話しやすくなったが、実際に自分の所属する附属機関の会議に戻って発言すると、やはり受け入れられなかったというような話でも良いので、再度集まって共有できる機会があると良いと思う。

<内田座長>

- ・ そのような機会をつくるアイデアがあれば、またご意見をいただきたい。

報告事項（２）

<事務局>

（資料４「新たに設置された附属機関等に係る協議結果（一覧）」，資料５「市民参加に係る新しい事業や取組」報告）

<乾副座長>

- ・ 資料４に関して，コロナワクチンの附属機関で，会議を公開しているのに市民公募委員を入れないのは問題ないのか。コロナワクチンの接種に関しては，市民にとっても重要な事項で，動向を知る必要があるのではないか。

<事務局>

- ・ この附属機関での審議内容がワクチンの接種に関わる医師，看護師等の役割分担等の事務的な内容であり，政策的な内容ではないため，市民公募委員は選任されていない。

<村田委員>

- ・ ワクチンの予約をしたが，その後，クリニックから断られる経験をした。ワクチンの供給情報等の話まで議論されるのであれば，公開されるべきだと思う。

<事務局>

- ・ この会議自体の内容は公開されている。市民公募委員は選任されていない。

<内田座長>

- ・ 以上で本日の議題，報告事項は終了となる。皆さん，ありがとうございました。

５ 閉会

<事務局>

- ・ 本日は長時間に渡りご議論いただきありがとうございました。双方の部会の議論の様子を見させていただいたが，いずれの部会も検討が始まったところだろうと認識している。一つ意見を申し上げると，どちらの部会も議論だけでなく，実際に活動されているところを見る，或いは参加する必要があるのではないかと思う。引き続きよろしく願います。

以上